

コロナ関係資料のデータベース構築に向けて



博物館の窓

第102回

学芸員

持田

誠

2023年11月24日、東京大学の安田講堂を会場に、シンポジウム【新型コロナの記録と記憶：「何を、誰が、どう残すか」が開催されました。6名の登壇者と会場参加者との間で、今回のコロナ禍の記録をどう残し伝えていくかが議論されました。

浦幌町立博物館でも、コロナ禍における地域の暮らしの変化を記録する資料の収集を実施しています。今後は、国の科学研究費補助金による研究課題【COVID-19のパンデミックへの歴史的「介入」―歴史化のための記録と記憶の保全】(研究代表者：飯島涉青山学院大学教授)のプロジェクトへ加わり、新たに構築するコロナ関係資料のデータベースへ登載することとなりました。

大学や図書館、医療や情報学の関係者など、さまざまな機関や立場の人々との連携により、当館の所蔵資料が地域を越えて有効に活用されることを目指します。



シンポジウム【新型コロナの記録と記憶：何を、誰が、どう残すか】で討論を行う登壇者。

当館学芸員は、会場から報告・意見を行うとともに、終了後の作業部会で今後のコロナ関係データベースの設計について意見効果を行ないました。

データベースは国立歴史民俗博物館が主体となって構築し、当館も年度内から始まる試験段階から加わって、新年度からの運用に向けて協力していきます。

(2023年11月24日 東京大学)